

太閤ヶ平周辺の城郭遺構確認調査について

西 尾 孝 昌

1. はじめに

昨年度から、太閤ヶ平をはじめとする鳥取城包囲の陣城群の調査を進めている。調査は例年の如く、中世城郭の曲輪・堀切・土塁・竪堀・横堀などの遺構を表面観察し、主に巻き尺・クリノメーターなどで計測を行い、縄張図（略測図）を作成する手法である。調査担当は、鳥取市教育委員会文化財課（佐々木孝文・坂田邦彦・細田隆博）と筆者である。

本年度は、昨年度未調査であった五反田平の城・昼食山城・円護寺の陣城（伝・垣屋光成の陣所）・瓢箪池北西の陣城群・桂見の土塁・三津ヶ崎本陣山城・樗谿神社北側尾根の陣城群などの調査を実施した（第1図・第2図）。今回は、これら陣城群の報告である。

2. 五反田平の陣城（第3図）

城は円護寺集落の東側、標高約161.8mの独立丘陵に立地し、麓との比高は約111mを測る。城域は東西約80m、南北約25mを測る。

城は連続する3郭で構成されている。主郭1は東西約22m・南北約11mあり、土塁で囲繞されている。土塁は幅約3m・高さ0.3～0.5mを測り、西側は櫓台式の高まり（8×4.5m）となっている。虎口は東側と西側に設けられているが、東側虎口は幅約2.5m、西側虎口は幅約1mを測る。曲輪2（15×8m）も土塁囲みで、曲輪1の虎口受けとなっており、二重の虎口となって防御性を高めている。曲輪2の虎口は幅約3mある。曲輪1と曲輪2との段差はしっかりしており、約2.5～3mを測る。曲輪3（8×16m）はやや傾斜した曲輪で、3段程度に分かれている。

城は東（曲輪2）方向からの敵の侵入を意識しており、西（曲輪3）方向への警戒は低い。鳥取城は西方向に位置するが、防御性の高い急斜面を意識してのことであろうか。何れにしても、城は鳥取城を攻める最前線に位置し、その背後（東側）には（伝）秀長の陣を初めとする防御ラインが存在する。

3. 瓢箪池北西の陣城群（第5図）

瓢箪池北西尾根は鳥取城から太閤ヶ平に至る主尾根ルートにあたり、そこに3つの陣城が構築されている。
<陣城A>

陣城Aは主尾根ルートの南側に構築されており、土塁囲みの2つの曲輪と帯曲輪で構成されている。その規模は東西約25m・南北約70mを測る。主郭1は19×14mを測り、土塁は幅約3～3.5m・高さ0.5～0.7mある。虎口は2ヶ所あり、北西側の虎口は幅約4m、南東側虎口は幅2.5mを測る。曲輪2（11.5×9.4m）も幅約3.5m・高さ0.5mの土塁に囲繞されており、東側に坂虎口が開く。虎口幅は約2.5mを測る。主郭1と曲輪2を取り囲む帯曲輪は幅約3～4.5m程ある。さらに、帯曲輪の南東には4段程度の小曲輪が設けられている。城は主尾根ルート側（北側）に向けて造られており、明らかに主尾根を押さえる構えをしている。また城の南下には寺屋敷の陣城もあり、一つの防御ラインを形成しているとも見ることが出来る。

<陣城B>

陣城Bは主尾根ルートの北側に構築されており、谷を隔てて約200m北には五反田平の陣城を望むことが出来る。

城は、食い違い状の土塁をもつ主郭1（9×35m）に帯曲輪を巡らせた単純な縄張りである。土塁は幅約3m・高さ約1mを測り、鳥取城方向を向いている。陣城A・寺屋敷の陣城・五反田平の陣城と共に、防御ラインを形成しているようである。

<陣城C>

城は主尾根のど真ん中に占地し、直接鳥取城から太閤ヶ平へ抜けるルートを押さええている。主郭1（10×38 m）と曲輪2（10.5×8 m）に帯曲輪を巡らせ、主尾根に小曲輪群を配置している。曲輪3はやや横堀状を呈しており、土塁（幅約4 m・高さ0.5～0.8 m）を設けて虎口としている。虎口は、鳥取城方向を向いている。

これらの陣城群は、鳥取城から太閤ヶ平に至るルートを押さえる役割を有すると共に、（伝）秀長の陣を初めとする防御ライン（「太閤ヶ平を守る最終ライン」）の前線に位置し、寺屋敷・五反田平の陣城と連携する防御ラインを形成しているようである。

4. 円護寺の陣城（伝・垣屋光成の陣所）（第4図）

この陣城は、円護寺集落東側の丘陵標高140～90 mに位置し、丘陵全体に遺構が広がっている。城域は東西約480 m・南北約110 mを測る広大なもので、鳥取城包囲の陣城の中で最長である。

城は大きく、Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区に分かれる。

<Ⅰ区>

Ⅰ区は、標高140 m地点にある土塁囲みの主郭の背後（北東側）に3段、前面（南西側）に3段の曲輪を配置し、北側に2段の小曲輪を設けている。主郭前面の土塁囲みの曲輪には、Ⅱ区方向に向かって虎口を構築している。特徴的なのは、主郭から西下約60 mにわたって縦土塁を設けていることである。南東谷部からの防御に備えたものであろう。

<Ⅱ区>

Ⅱ区の最大の特徴は、鳥取城方向を向いて構築された長大な土塁である。土塁は幅約2～4 m・高さ0.5～1.3 mを測り、随所に折れをもつ。土塁長は約350 mを測る。土塁の前面（南西側）には、さらに土塁をもつ帯曲輪が巡る。土塁の背後（北東側）には、幅15～36 mを測る広大な空間が広がっている。尚、南東側には土塁間に入る虎口を構築している。

<Ⅲ区>

尾根頂部の広大な空間から南西方向に延びる尾根に、曲輪群を構築して防御を固めた縄張りである。一部に古墳も再利用しているようである。

円護寺の陣城は、他の陣城とは異なり頗る広大である。兵の一大駐屯地という見方も出来るが、軍需物資の保管場所を想定してはいかがであらうか。また城は、鳥取城包囲の最前線の城であるだけでなく、太閤ヶ平を防御する最終ラインである秀長の陣や五反田平の陣城と共に防御ラインを形成しているようにみえる。二つの防御ラインが一つに繋がる場所が円護寺の陣城である。

5. 樗谿神社北側尾根の陣城群

樗谿神社北側尾根は太閤ヶ平から南西方向に派生してきた尾根で、約1.4 km程あるが、その間に確認できるもので、8つの陣城が散在する。

<陣城A>（第6図）

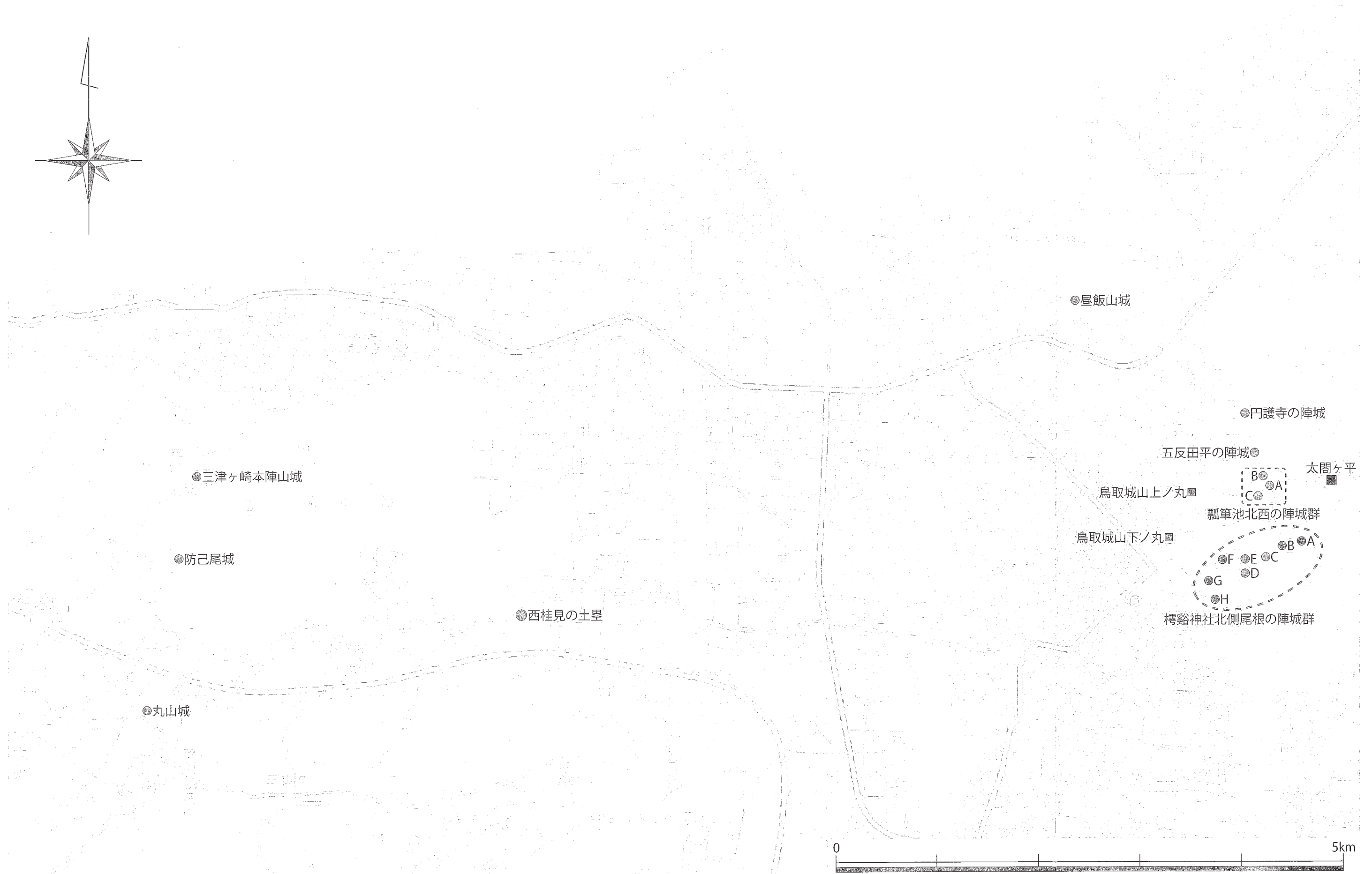
尾根の最上段に位置する城で、標高約180 mに所在する。城域は東西約80 m・南北約25 mを測る。主郭1は14×30 mを測り、東側と西側に土塁を構築している。土塁は幅約2.5 m・高さ0.4～0.5 mを測る。主郭1の北西側に帯曲輪を巡らせ、西下に6段ほどの小曲輪群を配置している。

<陣城B>（第6図）

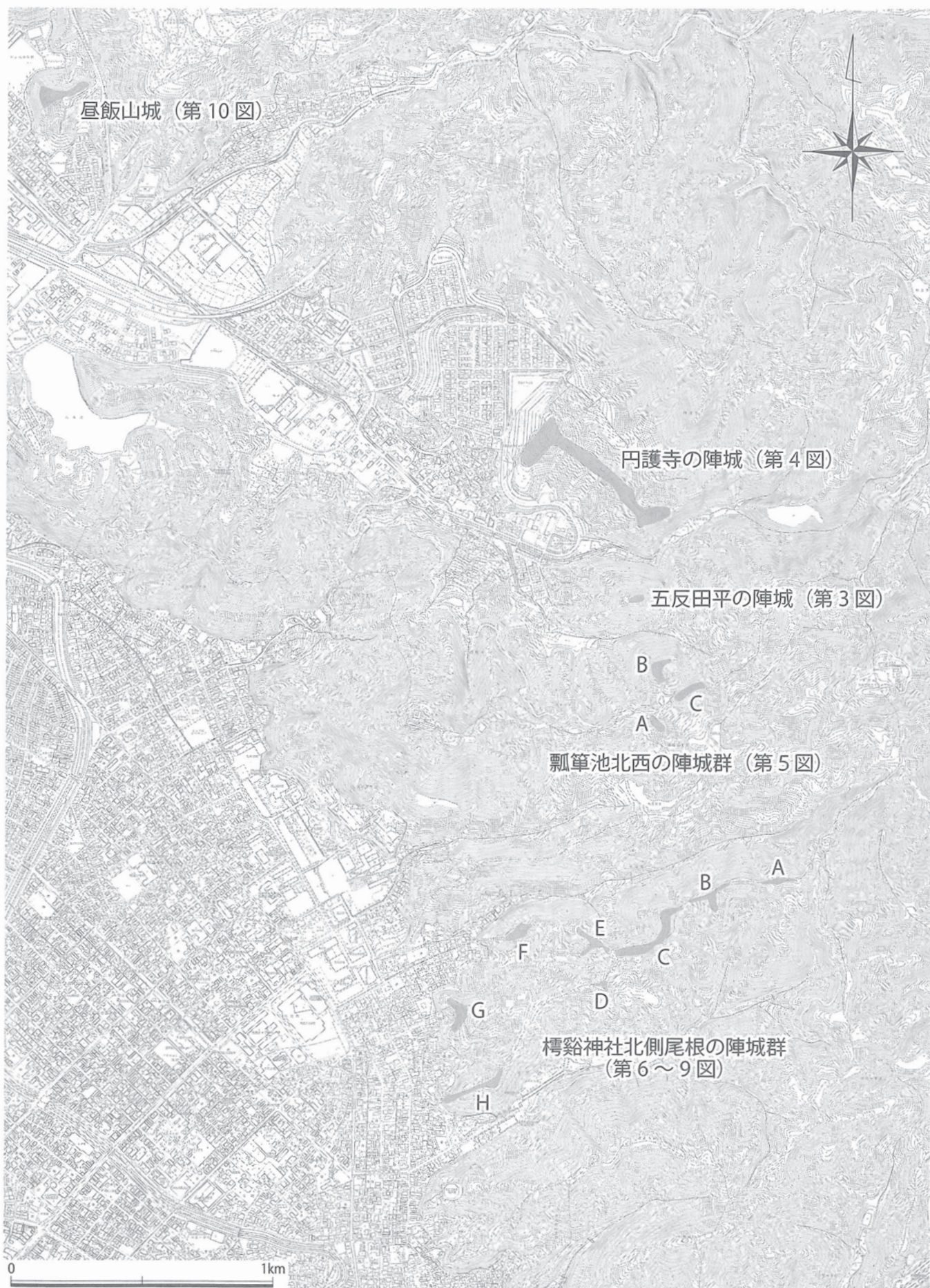
標高約161 mに位置する主郭（10.5×12.5 m）から3方向に延びる尾根に小曲輪群を配置した縄張り、土塁は構築されていない。

<陣城C>（第7図）

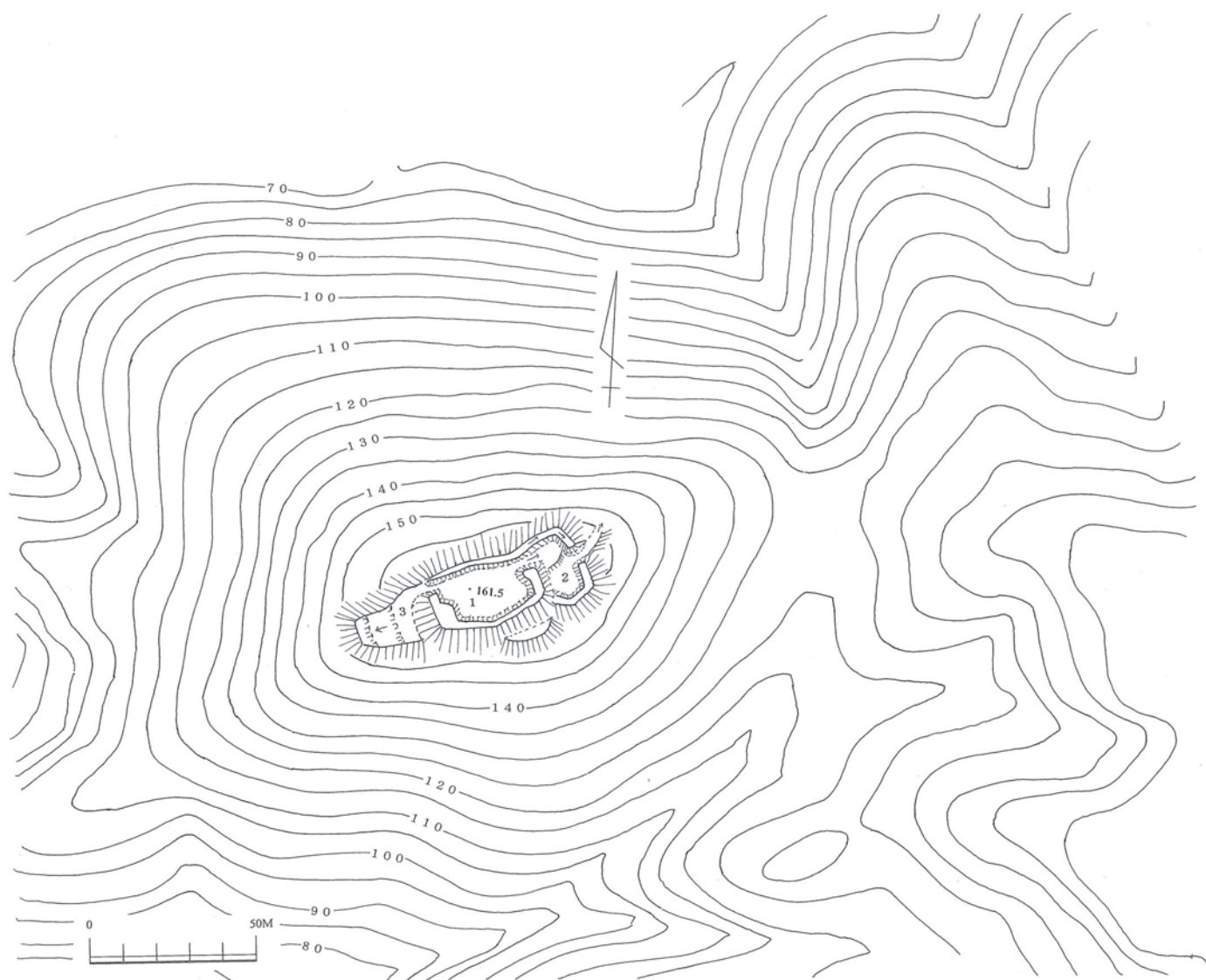
陣城Cはこの尾根筋の中では最大の陣城で、城域は長軸約260 m・短軸約80 mを測る。



第1図 陣城遺構位置図 (1/35000)



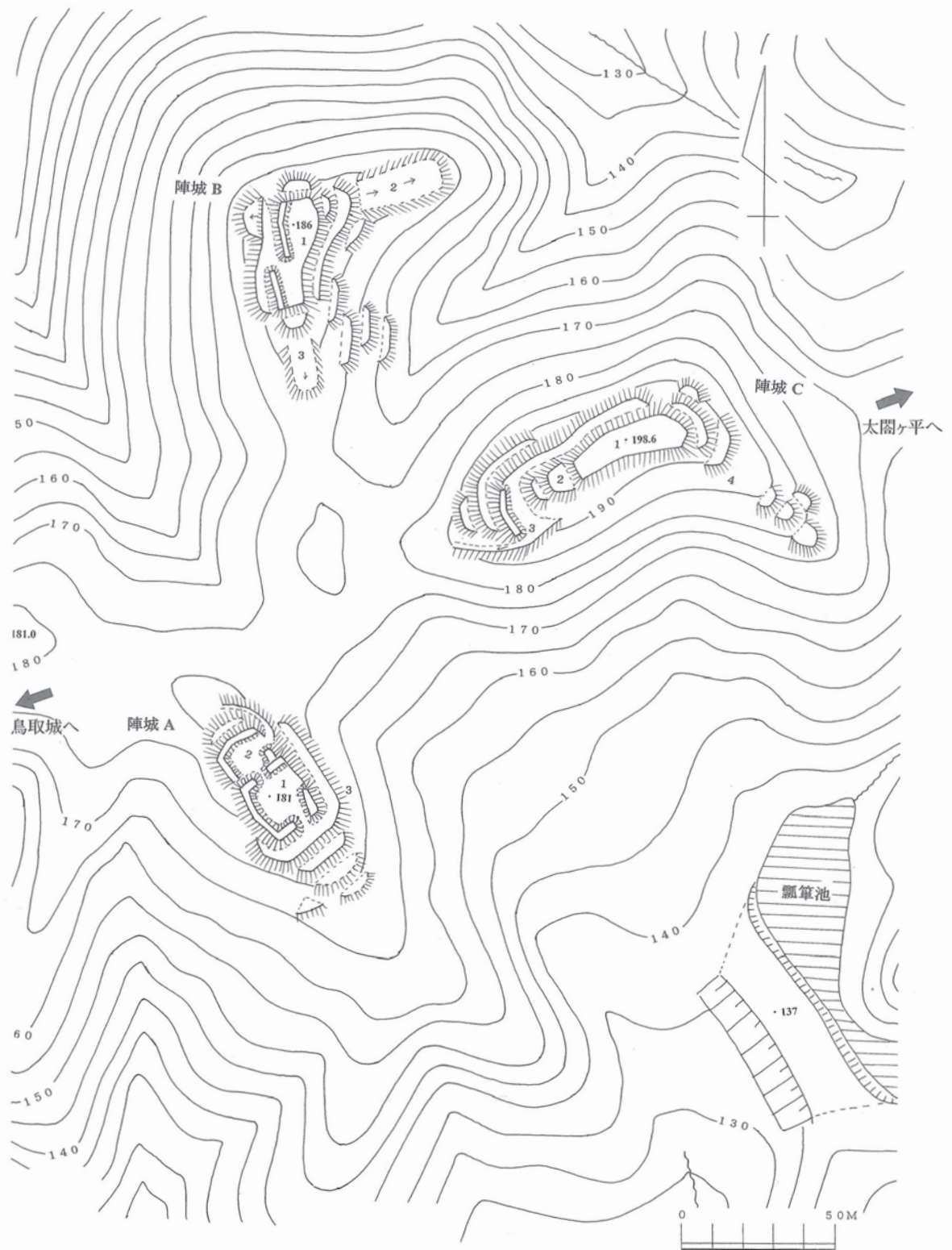
第2図 陣城遺構位置図 (1/20000)



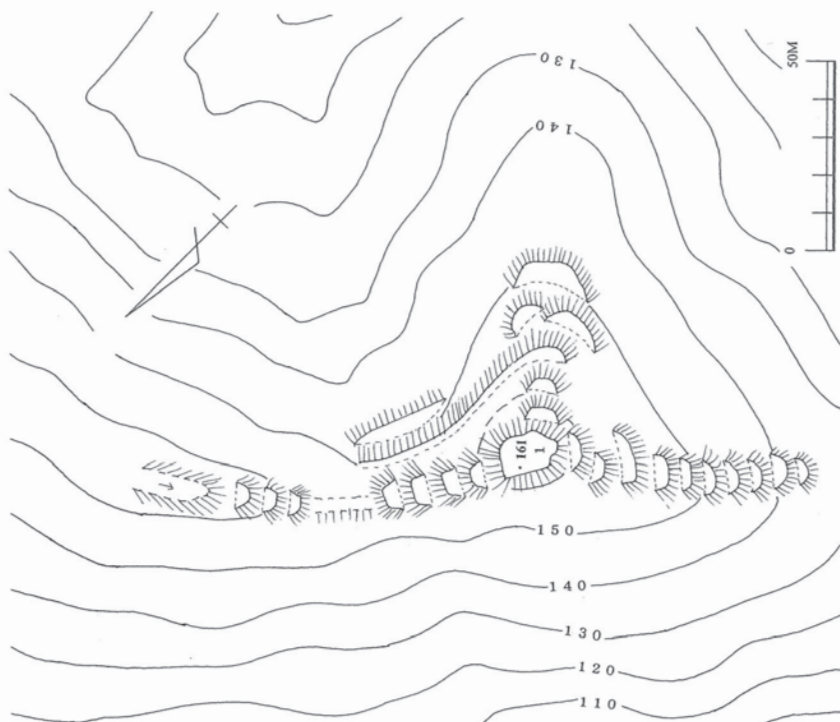
第3図 五反田平の陣城遺構



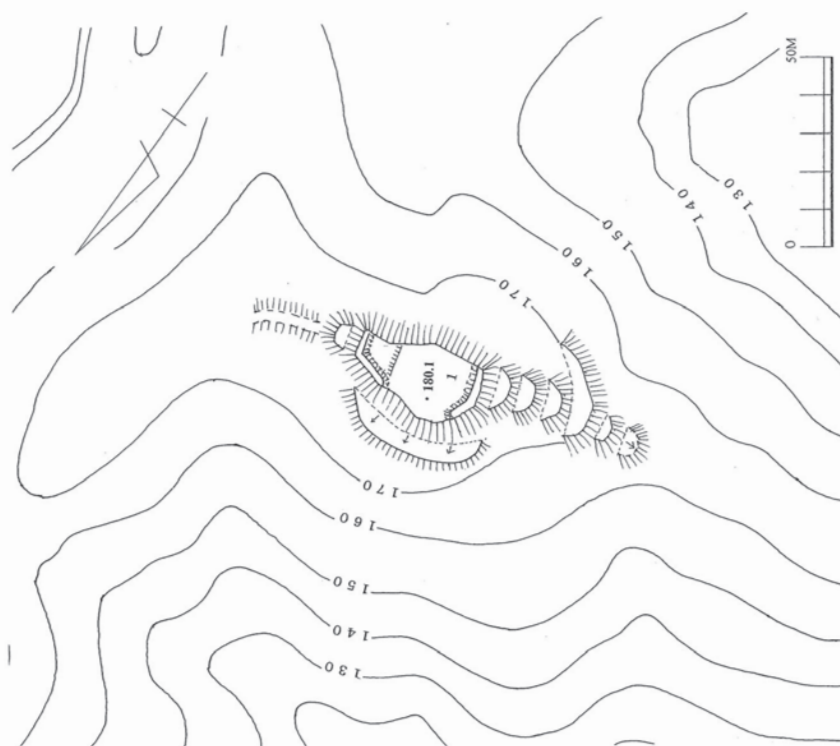
第4図 円護寺の陣城遺構



第5図 瓢箪池北西の陣城遺構

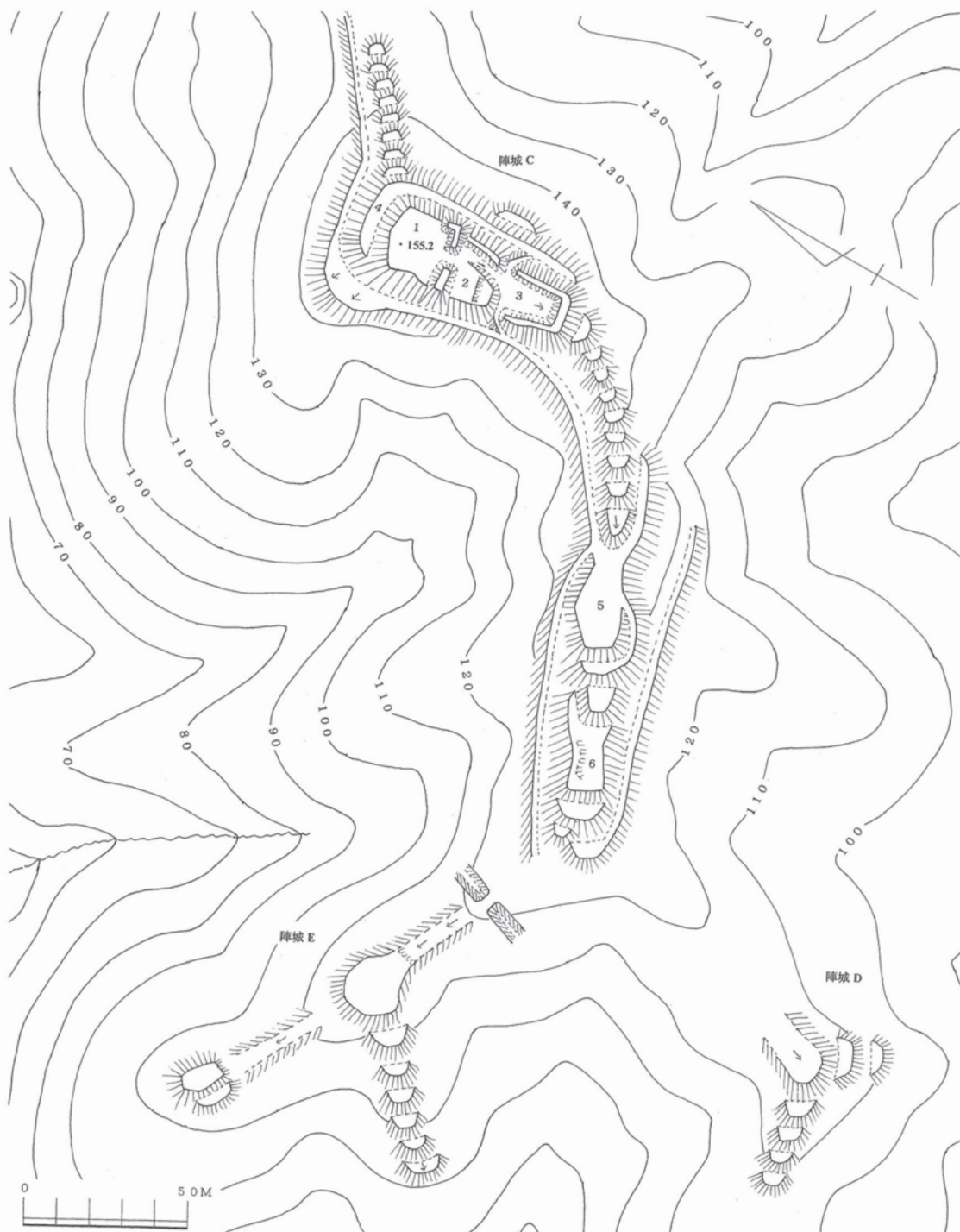


陣城 B



陣城 A

第 6 図 樗谿神社北側屋根の陣城遺構 1



第7図 樗谿神社北側屋根の陣城遺構2

全体的に、土塁を駆使した縄張りが顕著に見られる。

城は、主郭1・曲輪2・曲輪3で主郭部を構成している。主郭I（14×15.5 m）の南側には高い土塁（幅約4 m・高さ1.3 m）が構築され、曲輪2方向に平入り虎口（幅約3.8 m）が開く。曲輪2（14.7×15 m）は東側に土塁（幅1.8 m・高さ0.3 m）を構築し、曲輪3方向に坂虎口が開く。曲輪3（10×17.5 m）はコの字状に土塁（幅2.3 m・高さ0.5 m）が巡り、2ヶ所に虎口（幅2～2.2 m）をもつ。さらに主郭部は、全体的に帯曲輪が巡らされている。

主郭部の背後（北東側）には9段の小曲輪、前面（南西側）には15段程度の曲輪群を配している。曲輪は何れも小規模であるが、曲輪5（10×29 m）と曲輪6（8×21 m）はやや大きい。

<陣城D・陣城E>（第7図）

陣城Dは主郭（幅8 m）から2方向の尾根に小曲輪を配置したもので、土塁はみられない。陣城Eも主郭（13.4×22.5 m）から2方向の尾根に7段程度の小曲輪を配置したものであるが、主郭背後に土橋・堅堀（幅3～4 m・長さ8～12 m）を構築している。

<陣城F>（第8図）

陣城Fは龍峰寺北東の尾根突端に所在する。曲輪1（28.5×39 m）に曲輪2（8.5×9.5 m）と曲輪3（30×11.3 m）で構成する帯曲輪がめぐり、ここに立てば眺望がきき、鳥取城の動きは手に取るように分かる。

<陣城G>（第8図）

陣城Gは日香寺北東の尾根突端に所在する。この尾根の他の陣城と異なり、土塁や小曲輪群が構築されておらず、全体的に削平は不十分で、陣城かどうかの判別は難しいが、一応陣城としてあげておく。

<陣城H>（第9図）

禰谷神社北側尾根筋の突端、芳心寺東側に所在する。伝仙石権兵衛の陣ともされている。

主郭1（17.2×19.6 m）は一部に低い土塁がみられ、曲輪2から延びる帯曲輪が巡る。そこから南西側に18段程度の小曲輪群を配置している。曲輪4（10×26.5 m）と曲輪5（16×10 m）はやや大きいものの、他は小規模である。

この尾根にこれら陣城群が集中するのは、城下町から太閤ヶ平へ至る尾根筋を防御すると共に、相連携して太閤ヶ平と城下町を守備する包囲網とを繋ぐ「鳥取城包囲のライン」を形成していたものと思われる。

6. 昼食山（ひるやま）城（第10図）

昼食山城は中ノ郷中学校東側、浜坂中央公園北側、標高約54.8 mに所在する。城は宅地造成や中ノ郷配水池建設に伴って、昭和55年・昭和58年の二度にわたり発掘調査が実施され、長大な堅土塁を含む遺構が破壊された。但し、山頂部（中ノ郷配水池の北側）の遺構はよく遺存している。

主郭1は東西約18 m・南北約14 mを測り、3分の2ほど土塁（幅約2.5 m・高さ約0.5 m）に囲まれている。虎口は南側に開き、幅約4.5 mを測る。

主郭1の約2.5 m下には、曲輪2（19×8 m）と曲輪3（15×23 m）を連結した帯曲輪が巡らされている。曲輪2は土塁を持ち曲輪4へ虎口が開く。曲輪4は主郭1と曲輪2を取り囲む帯曲輪（幅8～9 m）となっている。さらに曲輪4の西下には3つの土塁で仕切られた緩斜面が存在する。

曲輪3の東側には、曲輪5（10×11 m）・曲輪6（10×10 m）・曲輪7（9×45 m）・曲輪8（17×5 m）が設けられている。曲輪6は土塁で囲まれた虎口状の曲輪となっており、東側の土塁は幅約5 m・高さ約2.5 mを測る。

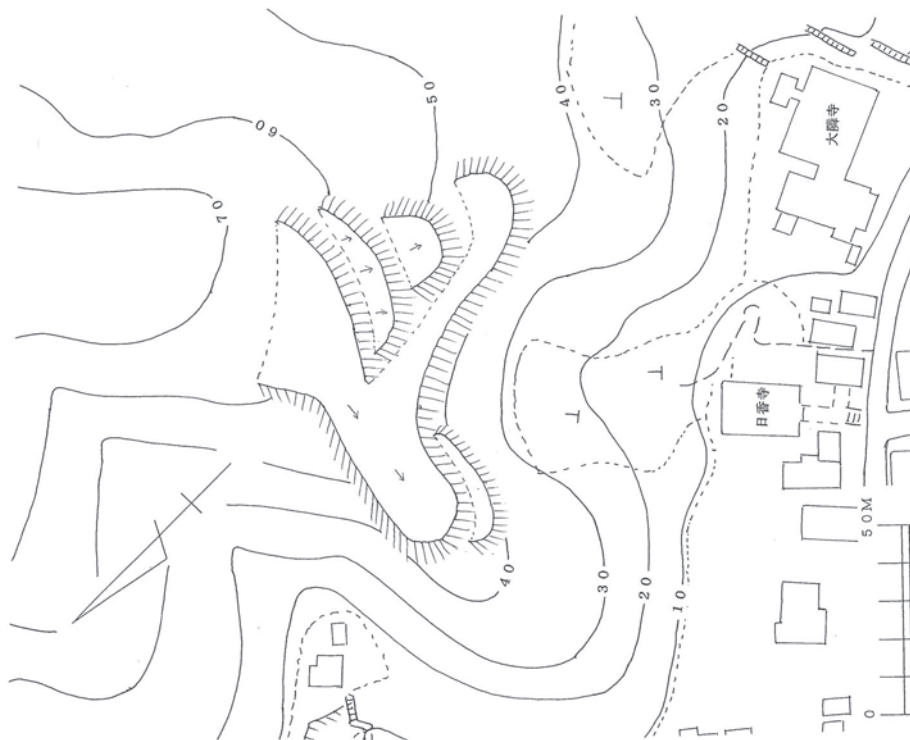
配水池の南側には、現状で2条の土塁（a・b）が見られる。土塁aは堅土塁となっている。また土塁bはしっかりして大きく、幅3.3～3.5 m・高さ0.7～0.8 m・長さ31.5 mを測る。但しこの範囲は既に発掘され、埋め戻された跡のようである。

『ヒル山砦跡発掘調査報告書』『ヒル山砦・熊田古墳発掘調査報告書』（鳥取市教育委員会）によれば、次のようである。

①土塁aはさらに配水池の方向に延びており、山頂部から土塁（幅2.1～2.2 m・高さ0.3 m）が全長75

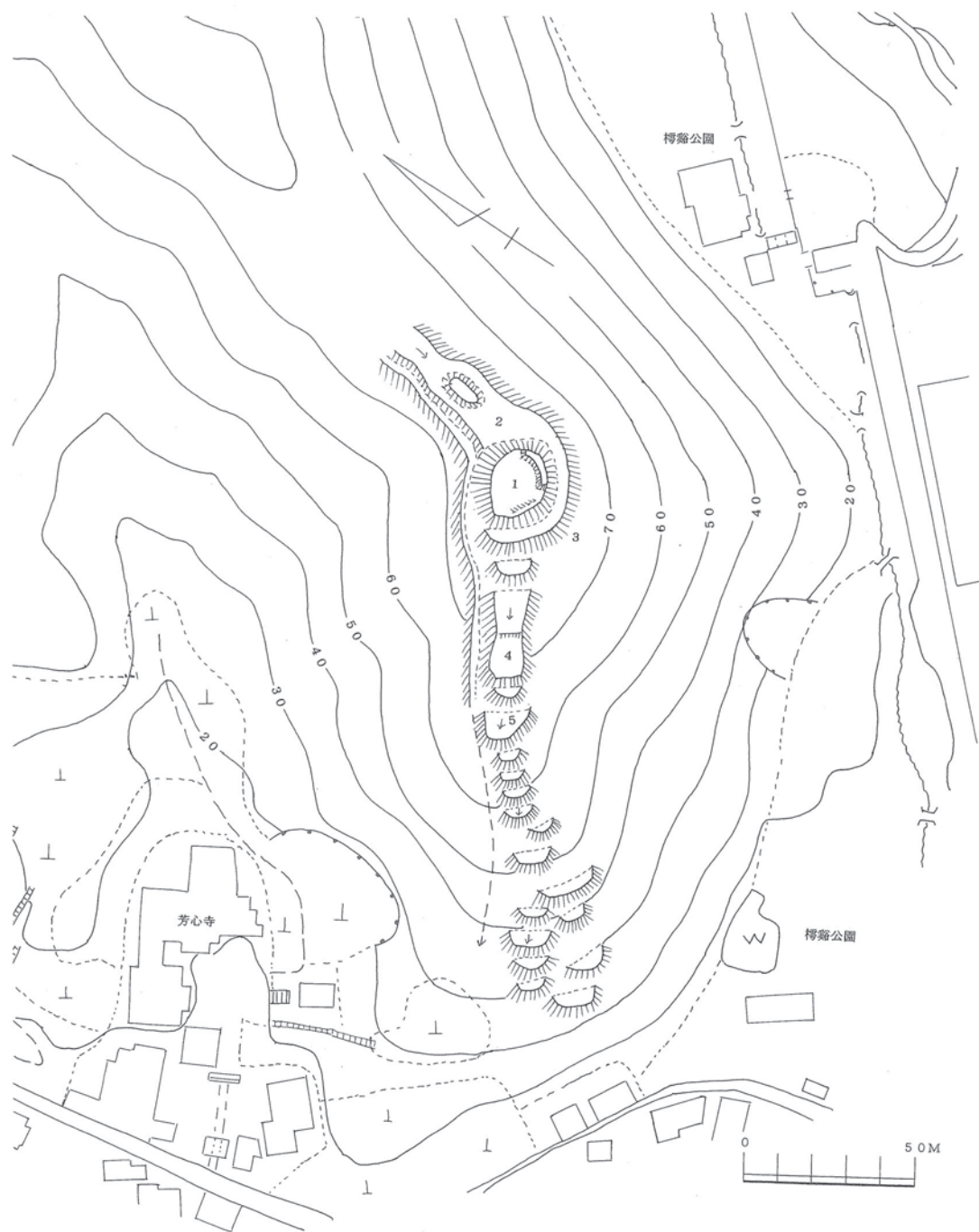


陣城 F



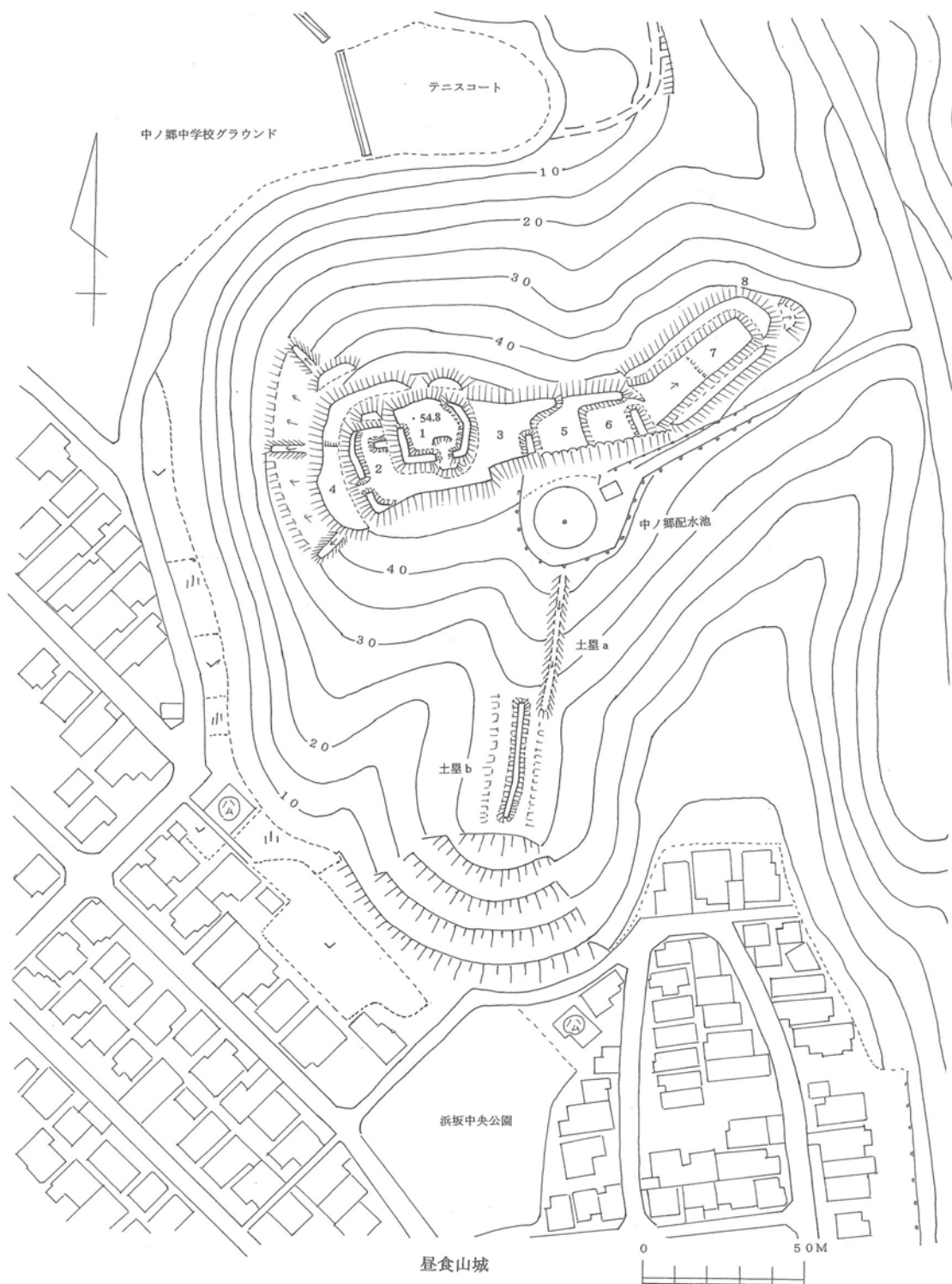
陣城 G

第 8 図 梶谷神社北側屋根の陣城遺構 3



陣城H

第9図 樽銘神社北側屋根の陣城遺構4



第10図 昼食山城の遺構

mにわたって構築されていた。しかも、この豎土塁にはその西側に10段程度の小曲輪（平均全長8～10m・幅3～5m）が配置されていた（第11図）。

②土塁bの南側には、東西約6m・南北約20mを測る曲輪があり、土塁で囲繞されていた。「東側土塁の規模は基底の幅約6m、上縁幅1.5m、高さは郭面より約0.7～0.9m、外縁より約2mを測り、南面部の基底幅3.5m、上縁幅郭面より0.5m、外縁より1.5mを測る。このように第1郭（曲輪）を外縁より高くして土塁を衝立状に廻らすという構造をもっている。」という。また南西隅には「1平方メートル程度」の櫓台状遺構がみられた、という（第11図）。

昼食山城は山頂部の西側と豎土塁を設けた南側の防御性が高く、西方向と東方向（鳥取城方向）とに防御の主力が傾注されている。その間の谷部が、物資輸送の一拠点となった可能性もあろう。また、円山川を隔てた南西方向には、羽柴秀長らが接収した丸山城を望むことができる。縄張りから考えて、昼食山城と丸山城は相連携して北方防御の拠点となったことが考えられる。

7. 西桂見の土塁（第12図）

西桂見の土塁は、既に平成8年主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴って鳥取市市埋文センターによる発掘調査が実施されている（鳥取県教育文化財団調査報告書46『主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II 鳥取県鳥取市西桂見遺跡・倉見古墳群』）。

発掘調査によると、尾根筋（鷲谷地区A区）の土塁は長さ45m以上、幅10m、盛土の厚さ最大1.7mを測るという。時期的には、備前V期の播鉢や土師質土器の出土から16世紀頃が想定されている。また、その特徴を次のように記している。

①立地は狭い尾根上に作られている。

②全て盛土によって築造され、断面台形状を呈するが、西側は緩やかで東側には急になり、平坦面になっている。

③頂部平坦面は尾根中心より西側にある。

④盛土の中心部は岩盤破碎礫層と暗灰褐色砂質土層が互層状に非常に固く突き固められ、柱状にみられる。

この層は断面のジグザグになっており、盛土を行う際に中心部のみを突き固めていったものと思われる。

⑤盛土の下には、盛土に先立って溝が掘り込まれている。

⑥土塁は丘陵支脈にも築かれている。

今回は、その道路（発掘調査範囲）の南側尾根を調査した。

土塁は南北の尾根筋に沿って、約260mにわたって構築されている。土塁は大きくI～IV区に分けることができる。

I区の土塁は幅約2.5～3m・高さ約0.5～1.3mを測り、随所に折れを持ちながら緩やかに南方向に傾斜している。また、土塁の東側と西側に幅2.5～5mを測る帯曲輪状の平地が付随するのも特徴的である。尚、土塁は北向きには延びず、東側の尾根筋に延びているようにみえる。

II区は土塁が途切れ、標高42m地点に4段の小曲輪を構築している。大きさは、8×5m、10×5m程度のサイズである。

II区から土塁は標高62m地点まで緩やかに上っていく。土塁は幅2.5～3m・高さ0.9～1.5mを測る。III区の標高62m地点は幅広い土塁というよりも、小曲輪（10.2×6.5m）といった感じの平地を設けている。土塁はさらに南側に延びていたようであるが、美術館建設工事によって大きく破壊されている。

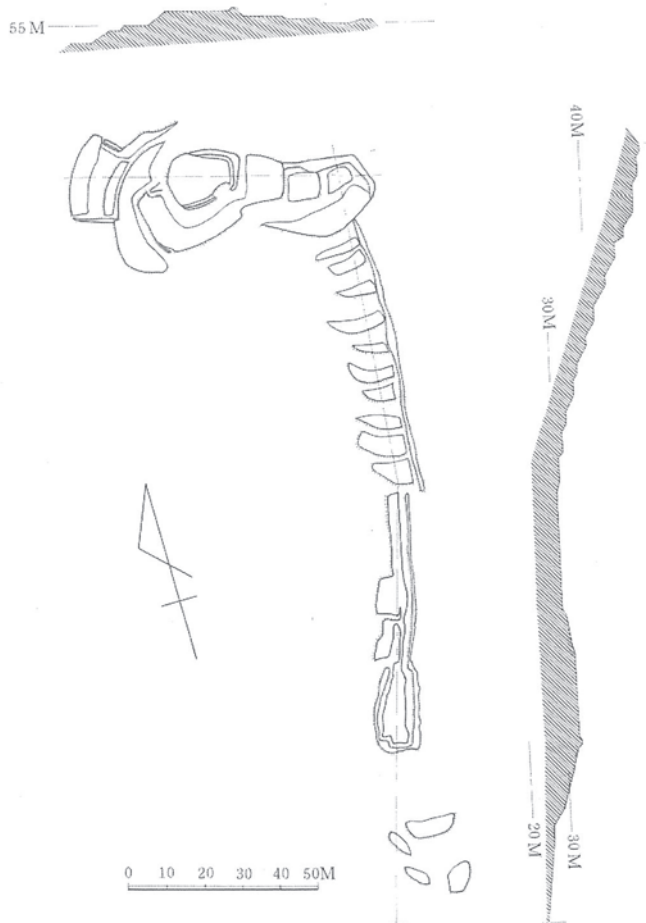
IV区には、2条の土塁（豎土塁）が尾根筋の東から西方向に延びている。上段が幅2m・高さ0.6m・長さ8m、下段が幅2m・高さ0.5m・長さ34mを測る。

桂見の土塁は、発掘調査によると、さらに北側の湖山池方向に延びていたようである。また報告書によると、今回調査した尾根のさらに南側にも延びているそうである（今回は未調査）。

現段階で、この土塁をどのように解釈すべきであろうか。種々の解釈が成り立つと思うが、筆者は、鹿野方面から繰り出すであろう毛利勢を食い止めるために、秀吉が構築したものではないかと考えている。

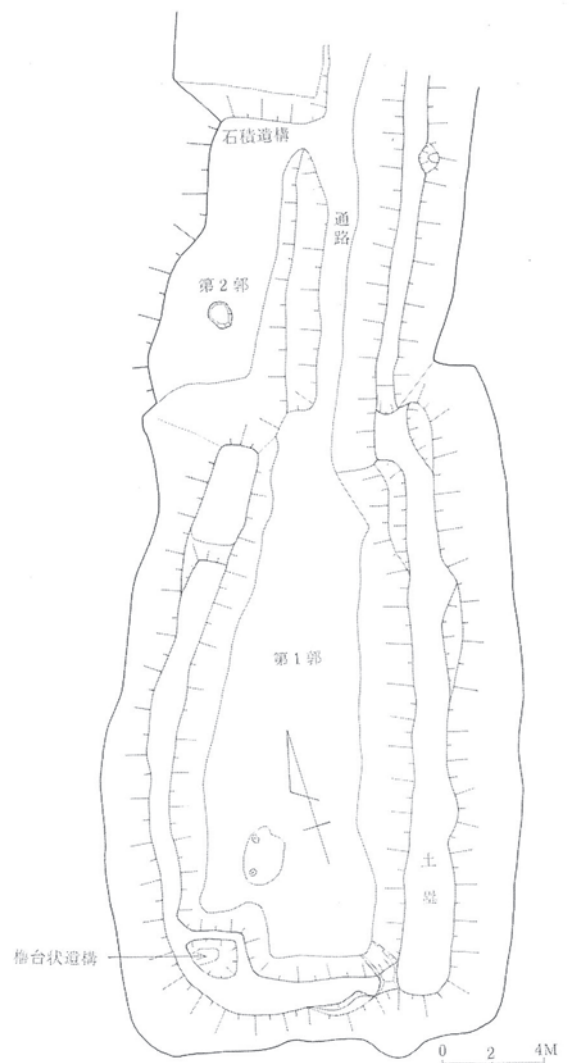


ヒル山砦位置



ヒル山砦遺構要図

鳥取市教育委員会 1980
『「ヒル山砦」「熊田古墳」発掘調査報告書』
より抜粋、一部改変



平面実測図（調査後）

第11図 ヒル山砦発掘調査実測図



第12図 西桂見の土塁遺構

8. 三津ヶ崎本陣山城・防己尾城・吉岡丸山城（第13図）

寛永21年（1644）の『山縣長茂覚書』によれば、天正9年（1581）秀吉は「吉岡城」攻めを行ったが敗れ、馬符（馬印）を捨て敗走したことが記されている。この「吉岡城」は「彼城湖へ差出、尾頸計地続也」とあることから、「吉岡安芸守（将監）」の守備する防己尾城であったことが分かる。秀吉は城の北面する湖山池側から攻め入ろうとしたが、用意周到に警備されていた防己尾城の城兵に撃退されたようである。

一、吉岡安芸ハ芸州馳走之仁也、鳥取ヨリ西中間五三里有之歟、彼城湖へ差出、尾頸計地続也、筑前守（秀吉）殿夜中ニ彼表御出馬、有尾頸之手死、人数被遣、自身ハ城之尾崎際へ舟ヲ寄、湖へ可被追崩行ニ候処ニ、城内ヨリ尾崎之勢突き崩、湖へ追付ル敵船踏返シ、数百人死人有之、筑前守殿馬符（馬印）迄被捨置、危ク御退之事、

一、吉岡城へ筑前守殿御出馬之夜中、諸陣自早晚物静ニ候ツ、夜明見候へハ、持口持口へ人数打出、武具の不里差物等立并、堅固之躰驚目候、此時敵陣勢十萬騎程茂可有之哉と、城内功者共申而候事、

<三津ヶ本陣山城>（第14図）

この防己尾城攻撃にともなう、秀吉が構築した陣城が三津ヶ崎本陣山城であるという。城は防己尾城から湖を隔てて、北側約700mの至近距離に位置し、防己尾城の様子を具に窺うことが出来る。

城は三津神社南側、湖山池に突出した尾根に所在する。縄張りは、主郭1から曲輪3まで連郭式に曲輪を配し、そこから2方向に数段の曲輪を構築した単純なものである。因みに、主郭1は15×30m、曲輪2は8×26m、曲輪3は18.5×32.5m、曲輪4は9×30mを測る。概して曲輪の削平は不十分で、段差も低い。堀切らしきものは2ヶ所見られるが、浅いものである。土塁や堅堀はみられない。全体的に、対峙した防己尾城の縄張りよりも劣る。

<防己尾城>（第15図）

防己尾城は本城と子城とで構成されているが、今回は遺構の保存状況の良好な本城のみの調査となった。

城は尾根鞍部を境として湖山池に面した「北城」と、地続きとなっている「南城」に分かれる。

〔北城〕

主郭1は東西約45m・南北約40mを測り、そこから3方向に延びる尾根に小曲輪群を配置している。また西側と東側の谷部には、切岸の高い帯曲輪群が構築され防御性を高めている。しかし、堅堀や土塁は僅かしか見られず、切岸の低い小曲輪群が卓越するところから、戦国期城郭ではあるが、その築城起源は南北朝期に遡ることも考えられる。

〔南城〕

大きな曲輪は曲輪2（東西約22m・南北約37m）と曲輪3（東西約20m・南北約47m）であるが、土塁・堅堀・横堀などを駆使して防御性を高めている。その点北城とは大きく異なる。南城は地続きとなっているため、南側の防御に腐心した結果であろう。

曲輪2は土塁（幅3～4m・高さ0.8m）が半周し、曲輪3へ至る坂虎口が設けられている。また北西斜面には、切岸の高い帯曲輪が四重に廻らされている。

曲輪3は曲輪4と連結されており、その西縁に長い土塁（幅約3.5～4m・高さ0.8～1.1m）を構築している。曲輪3・4の西側は10m以上の高い切岸を設け、その下には横堀（幅3.5m）と堅堀（幅4m・長さ22m）を巡らせている。横堀のさらに西側には数段の帯曲輪を構築している。曲輪3の東側にも数段の帯曲輪を巡らせている。また、曲輪3の南側には横堀（幅3.5m）とセットになった5条からなる畝状堅堀（幅約3m・長さ11～19m）が構築されている。尚、曲輪3から南東方向に落とされている堅堀は、幅4.5m・長さ30mと大規模である。

南城は土塁・高い切岸・横堀・畝状堅堀・帯曲輪を駆使して、最大限防御性を追及していることが判明する。戦国期の秀吉に備えた縄張りであろうか。

<吉岡丸山城>（第16図）

防己尾城の約1.4kmほど南には、吉岡丸山城が所在する。ここも吉岡氏の居城で、吉岡将監の父・吉岡春斎の築城とされている。秀吉との合戦の際には、この城も関わったことが想定され、その縄張りを調査し



第13図 陣城遺構位置図 (1/20000)



第14図 三津ヶ崎本陣山城の遺構



第15図 防己尾城の遺構



第 16 図 吉岡丸山城の遺構

てみた。

吉岡丸山城は、山頂部に3段の曲輪を配置し、その周りの斜面に切岸の高い帯曲輪を巡らせて防御する縄張りである。主郭部の南から東側にかけては、大規模な堅堀や畝状堅堀を構築して城の防御性を高めている。

主郭1は東西約28m・南北約27mを測り、曲輪2の方向に虎口が開く。曲輪2は東西約26m・南北約28mを測る。曲輪1と曲輪2の間には幅広い横堀（幅約8m・深さ8m・長さ約24m）を構築している。曲輪3は東西約25m・南北約15mを測り、曲輪2との段差は約2mである。

曲輪1・2・3の北側から東側にかけては、幅広い帯曲輪4（幅6.5～13m）が巡る。主郭1と帯曲輪4との段差は約5～6m程ある。帯曲輪4の下斜面には曲輪5・曲輪6・曲輪7を巡らせ、さらに堅堀オ（幅約4.5～5m、長さ約55m）・堅堀カ（幅約4.5m・長さ約20m）を構築している。

また曲輪1・曲輪2の西斜面は、曲輪8（12×7m）・曲輪9（19×8m）・曲輪10（10×40m）や曲輪11・曲輪12を構築して防御している。

さらに曲輪3の西から南の斜面には、大規模な畝状堅堀（堅堀ア・イ・ウ）や堅堀エを構築している。因みに、堅堀アは幅約8～10m・長さ約38m、堅堀イは幅約3.5m・長さ21m、堅堀ウは幅約8～9m・長さ約34m、堅堀エは幅約4m・長さ約35mを測る。防己尾城と比較すると、小曲輪群が少なく、各曲輪の規模や畝状堅堀の規模が大きいという特徴がある。同じように戦国期の改修がなされているが、縄張りの的には吉岡丸山城の方が優れているように見える。また、吉岡丸山城も南側を意識しての改修・補強がなされている。秀吉の攻撃に際しては、防己尾城が陸路（南）から攻撃された場合、丸山城はさらにその南から挟み撃ち攻撃をかける城としての役割を担っていたのではなかろうか。

9. おわりに

これまで判明している陣城を総て調査している訳ではないが、昨年度から今年度の陣城調査によって、ようやくその全体像が明らかになりつつあるように思う。今回は、その一端を紹介して、まとめとしたい。

①縄張りの的にみて、陣城は一様ではなく、いくつかのランクに区別できそうである。

A：大規模な土塁囲み、虎口・櫓台などを構築し、規模の大きな横堀がほぼ全周する。縄張りの的には抜群に優れているが堅堀はない。

（例）太閤ヶ平本陣。

B：土塁・横堀・虎口などが卓越し、大規模な堅堀や畝状堅堀によって各城塞が連結され、防御ラインを形成しているもの。

（例）伝・秀長本陣を初めとする「秀吉本陣を防御する最終ライン」。

C：顕著な土塁はないものの、大規模な横堀・堅堀を構築したもの。

（例）「寺屋敷」の陣城

D：横堀はないが、長大な土塁ラインを構成しているもの。

（例）円護寺の陣城（伝垣屋光成の陣）。西桂見の土塁。昼食山城。

E：土塁囲みで虎口もしっかりしているもの。横堀・堅堀はみられない。

（例）伝・羽柴秀次の陣。五反田の陣城。瓢箪池北西の陣城A。

F：曲輪に土塁が全周せず、部分的に土塁をもち、虎口が明確なもの。横堀・堅堀は伴わない。

（例）。樗谿神社北側尾根の陣城C。

G：曲輪に土塁が全周せず、部分的に土塁をもつが、明確な虎口が見られないもの。横堀・堅堀は伴わない。

（例）樗谿神社北側尾根の陣城A・陣城H。

H：曲輪のみで土塁・横堀・堅堀などを伴わないもの。顕著な堀切はみられない。

（例）三津ヶ崎本陣山城など。樗谿神社北側尾根の陣城B・陣城F。

②陣城の配置によって、防御ラインがある程度把握できそうである。前述したように、秀吉本陣を守備する「伝・秀長の陣を初めとする最終ライン」、伝・秀長本陣～円護寺の陣城、円護寺の陣城～五反田平の陣城～瓢箪池北西の陣城、樗谿神社北側尾根の陣城市群～城下町の陣城市群、昼食山城～丸山城などの陣城市群、などである。